

2021. 10. 3 (日) マタイ27:6~10

27:6 祭司長たちは銀貨を取って、言った。「これは血の代価だから、神殿の金庫に入れることは許されない。」

27:7 そこで彼らは相談し、その金で陶器師の畑を買って、異国人のための墓地にした。

27:8 このため、その畑は今日まで血の畑と呼ばれている。

27:9 そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの子らに値積もりされた人の価である。

27:10 主が私に命じられたように、彼らはその金を払って陶器師の畑を買い取った。」

<説教>

〈祭司長たち〉(27:6)はイエスを捕らえ殺すために、ユダのイエスへの裏切りの申し出(26:14,15)を喜んで受けて(マルコ 14:11、ルカ 22:4,5)、ユダに銀貨三十枚を支払いました(26:15)。

こうして〈祭司長たち〉とユダは手を結び、仲間となりました。

しかし、イエスが死刑に定められたのを知って後悔したユダが彼らのところに行き銀貨三十枚を返して「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」と言ったときに、彼らは「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」と言いつつ放っただけでした。

こうして〈祭司長たち〉に見捨てられ、裏切られたユダはイエスのもとに立ち帰ることなく、銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつったのでした(5)。

〈祭司長たち〉はユダが銀貨を神殿に投げ込んで立ち去るところは見ていたでしょう。

彼らはユダが投げ込んだ〈銀貨を取って〉、〈「これは血の代価だから、神殿の金庫に入れることは許されない。」〉と言いました(6)。

彼らが言った〈血の代価〉とは、ユダが先に言ったところの〈無実の人の血を売つた〉(4)代価ということで、「イエスの血の代価」ということになります。

彼らにとってイエスとは、自分を「神の子キリスト」「神の右の座に着いて、天の雲とともに来る者」と自称して「神を冒瀆する」汚らわしい罪人でした。

そんなイエスの〈血の代価〉は〈遊女の儲けや犬(神殿男娼)の稼ぎ〉と同じように主なる神に忌み嫌われるものであり、神殿に〈携えて行ってはならない〉(申命記 23:18)、つまり〈神殿の金庫に入れることは許されない。〉(6)と彼らは言ったのでしよう。

しかし、考えてみれば、そもそもこの〈銀貨〉(三十枚)は「弟子が自分の師を恩知らずにも裏切り売り渡す」という不正な取引に対する〈代価〉でした。

そんな「不義の代価」を(ほぼ間違いなく〈神殿の金庫〉から出して)喜んでユダに支払った祭司長たちこそは実は神を冒瀆していたと言うべきでしょう。

こうして〈祭司長たち〉は、自分たちは信仰深くきちんと神の律法を守っている正しい者だと思って言った言葉によって、図らずも(皮肉にも)自分たちの不義なることを白状したことになるのです。

こうしてマタイは、先にはイエスを裏切った(引き渡した)ユダの言葉を用いてイエスが「無実の人」であることを証言し、続けてそのイエスを引き取って(総督ピラトに引き渡し)(2)て十字架につけて殺した〈祭司長たち〉ユダヤ人(マタイの同胞)の罪を証言

しているのです。

さて、〈そこで彼らは相談し、その金で陶器師の畑を買って、異国人のための墓地にした。このため、その畑は今日まで血の畑と呼ばれている。〉(27:7,8)とマタイは続けます。

〈陶器師の畑〉とはエルサレムの西～南側の城壁を出た辺り、「ベン・ヒノムの谷」(エレミヤ 19:2、32:35 等)にあった陶器師の作業場と考えられます。

そこで陶器を作るための土が採られたとも、壊れた陶器や不出来な陶器が捨てられたとも考えられています。

そしてベン・ヒノムの谷には汚物や廃棄物の焼却場がありました。

また、ベン・ヒノムの谷は、かつてイスラエルの民が〈ほかの神々に犠牲を供え、この場所を咎なき者の血で満たし、バアルのために自分の子どもたちを全焼のいけにえとして火で焼くため、バアルの高き所を築いた〉(エレミヤ 19:4,5)汚れた場所でもありました。

彼らとすれば、イエスという神冒涜者の汚れた血の代価で買うに相応しい所、また〈異国人〉というこれまた汚れた罪人の〈墓地〉に相応しい所ということだったのでしょ

うか。〈その畑は今日まで血の畑と呼ばれている〉と言ってマタイは〈無実の人の血〉イエスの血が流された、イエスの十字架の死のいわば目に見える「物的証拠」として〈血の畑〉を示しています。

やはりマタイはユダや祭司長たち以上にイエスとその死に目を向けているのです。

彼らの罪さえもお用いになってイエスを十字架の死にお渡しになった父なる神に、そしてその父なる神に全く従順に十字架で死なれたイエスに目を向けているのです。

それで、父なる神が〈預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。〉(9a)とマタイは言います。

〈「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの子らに値積もりされた人の価である。主が私に命じられたように、彼らはその金を払って陶器師の畑を買い取った。」〉(9b,10)

〈預言者エレミヤを通して〉とマタイは言っていますが、正確にはゼカリヤとエレミヤの預言を合わせたものです(ここでは「大預言者」エレミヤの名で代表させたのでしょ

う)。全体的にはゼカリヤ書 11 章(特に直接的な引用は 13 節)からであり、〈金を払って〉〈畑を買い取った〉の部分がエレミヤ書 32:6-9 に拠っているようです(ただし「陶器師」のことも 18,19,32 章等の中で触れられています)。

ゼカリヤ書で言われていたことは、イスラエルの民が神と神が遣わした牧者(預言者)に対して余りにも低い評価〈値積り〉をし(〈銀貨三十枚〉は奴隷一人の値段)、不当に取り扱ったということです。

そのように〈祭司長たち〉イスラエルの民はイエスを全く見下し、不当に扱ったのです。

そしてエレミヤ書で言われていたことは、バビロン捕囚の危機の中にあって畑を買い取るなど意味のないと思われたことをエレミヤは神の命令によって行い、やがて捕囚から解放され、土地も買い戻される時が来るとい

う神の約束を先取り、希望を証したことです。そのように〈祭司長たち〉イスラエルの民の罪にもかかわらず、彼らにもなお真の信仰をもって神に立ち帰る(悔い改める)なら希望があるということでもありましょ

う。また、捕らえられていたエレミヤが畑を買い取ったように、捕らえられたイエスの〈血の代価〉で異国人のための墓地が買い取られました。

これはつまり、まさにイエスの〈血の代価〉で私たちが買い取られたことを象徴的に表

していると言っていいでしょう。

「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」(I コリント 6:20)、「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。人間の奴隷となつてはいけません。」(同 7:23) と使徒パウロは言います。

〈血の畑と呼ばれている〉場所(推定場所)は今日もエルサレムにはあるようです。

しかし、それよりももっと確実なイエスの十字架の死のいわば目に見える「物的証拠」〈血の畑〉は今やイエス・キリストの〈血の代価〉で買い取られた私たちキリスト者であり、キリストの教会なのです。